

# ピアノ

久保田雅子



テレビで「ピアノ買います…」とコマーシャルしているのを見た。ふと、自分のピアノの事を思い出した。

小学5年生のとき、私の誕生日に突然、家にピアノが届いた。

両親は私への誕生日プレゼントだというが、欲しかった覚えもないし、興味もなかった。もちろん弾けない。

うれしそうなふりをして「ありがとうございます」と言った。

早速、妹とふたりで、母の知り合いのピアノ教師の家へ通うことが決まった。  
<バイエル>というつまらない教本で、個人レッスンがはじまった。妹は楽しそうに自宅へ戻ってからも練習を重ねていた。私はなにも練習をしないで、次のレッスン日に行く。先生は不機嫌で、私には苦痛な時間だった。2～3か月するとピアノ教師から母に、

「妹さんは良くできますが、お姉さんはお断りです」と連絡があった。

母は不満そうだったが、私はほっとした。

そのころ小学校では<スペリオパイプ>という楽器（プラスチックの縦笛？）を、全員が買わされて音楽の時間に練習させられた。これも私はみんなと同じようには出来なかつた。どうしてもらちゃんと音がでない、指が動かない。

私は指先が不器用で、音楽は苦手だと、子供心にしっかりと自覚した。

（ずっと後になって、私は左利きだったので、母が小学校入学までに直した事が、右手が不器用の原因だとわかり少し納得した…）

ピアノは妹のものになり練習に励んでいたが、妹が海外留学して家からいなくなると、誰も弾かないピアノが残つた。

やがて私が結婚するときに、

「あなたにあげたプレゼントよ」と母はピアノを持っていくように言った。  
狭い新婚の部屋を、ピアノがさらに狭くした。ピアノの上は物置になつて、雑誌や洗濯物などが積み重なつておかれていた。

それでも娘が生まれてちょうどよい年齢になると、早速ピアノを習わせた。  
幸いなことに娘はいやがらずに練習に通つた。発表会にはおしゃれなドレスで出演をかさね、家族を楽しませてくれた。

だが彼女が結婚するときに、  
「ピアノは？」とたずねると、  
「いらない」と言われた。

実は娘もそれほど好きな事ではなかったのだと気付いた。  
また、だれも弾かないピアノが家に残った。  
ついに私はピアノを専門業者に頼んで処分した。

いま思うにピアノは高度成長時、庶民の夢の象徴だった気がする。

ピアノは女子のお稽古事では一番の人気だった。家にピアノがあることは、とてもすてきなことだったのだ。(私には大迷惑だったが…)

いまの子供たちはピアノのお稽古をするのだろうか?  
現在ではもっと進んだ新しい楽器が人気なのかもしれない…。

長い間一緒に過ごした私のピアノは、すでに外国に売られて、いまごろ誰かが弾いているのだと思うと少しほっとする。

